

東アジア・東南アジアにおける統合失調症に対する偏見・スティグマ

○原口健三, 多賀誠, 長谷麻由, 有久勝彦, 田代大祐
国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 作業療法学科

【INTRODUCTION】

東アジア・東南アジアでの統合失調症Schizophrenia (SC) に対する偏見やスティグマの実践報告は極めて少ない。本研究は、アジア地域におけるアンチスティグマの一環として、アジア地域の社会的・文化的背景と偏見・スティグマの構造を検討することを目的に、特に東アジアでの「統合失調症に対するスティグマ」の調査を行ってきた。今回、北東アジアおよび東アジアでの「統合失調症に対する偏見・スティグマ」を検証する。

【METHODS】

対象は、2004年から2016年に継続してきた「統合失調症に対する偏見・スティグマ」の調査対象地域（日本および韓国、中国、台湾、マレーシア、ベトナム）の学生と一般社会人2,288人（日本838人、韓国385人、中国313人、台湾456人、マレーシア211人、ベトナム50人）である。ベトナムの調査については、現地調査が実施できなかったために、日本において日本語学校に在籍する学生を対象とした予備調査の結果を追加した。

調査内容は、①人口統計学基礎データ、および②統合失調症に対するスティグマの評価（社会的距離尺度 Social Distance Scales ; SDS), ③精神医学的知識度 Knowledge of Illness and Drugs Inventory ; KIDI)である。SDSは8つの質問項目からなる自記式の質問紙調査（4段階のLikert scale）である。SDSJおよびKIDIはその信頼性と妥当性が確認されている。

【RESULTS】

1. Participants (Table 1)

集計の結果、1958名（日本680人、韓国334人、中国313人、台湾394人、マレーシア201人、ベトナム36人）から有効な回答が得られた（有効回答率85.6%）。

2. Social Distance of public towards people with schizophrenia (Table 2, Figure 1, Figure 2)

SDSの全体得点は、日本が最も低く、6か国の中では最も統合失調者に対するスティグマは弱かった（ $p < 0.001$ ）。韓国と中国、ベトナムでスティグマが強く（ $p < 0.001$ ）、台湾とマレーシアは日本よりは強いものの、韓国や中国、ベトナムよりも弱いスティグマが確認された（ $p < 0.001$ ）。SDSの下位項目では、「ベビシッターとしての雇用」や「統合失調者が自分の娘と結婚する」などの生活に密着した場面では、各国ともに強いスティグマを認めた。

3. 精神医学的知識度 (KIDI) (図1, 図3)

精神医学的知識度は、日本が最も高く、次いで台湾、中国の順であった。韓国とマレーシアで知識度が低かった。

Table 1. Participant characteristics

	Japan n=680	Korea n=334	China n=313	Taiwan n=394	Malaysia n=201	Vietnam [§] n=36	P
Mean age (years)	23.51 ± 7.95	23.73 ± 4.85	24.42 ± 6.22	29.11 ± 12.57	27.85 ± 10.60	22.47 ± 1.97	<.001 [†]
Sex							<.001 [‡]
Female	412(60.6%)	248(74.3%)	211(67.4%)	254(64.5%)	136(67.7%)	20(55.6%)	
Male	268(39.4%)	86(25.7%)	102(32.6%)	140(35.5%)	65(32.3%)	16(44.4%)	
Occupation							<.001 [‡]
Workers	103(15.1%)	76(22.8%)	130(41.5%)	152(38.6%)	77 (38.3%)	-	
Students	577(84.9%)	258(77.2%)	183(58.5%)	242(61.4%)	124 (61.7%)	-	
Others [§]	-	-	-	-	-	36(100.0%)	
Personal contact							<.001 [‡]
Experience	541(79.6%)	169(50.6%)	219(70.0%)	140(35.5%)	72 (35.8%)	22(61.1%)	
No experience	139(20.4%)	165(49.4%)	94(30.0%)	254(65.4%)	129 (64.2%)	14(38.9%)	
Psychiatric experience							<.001 [‡]
Work experience	31 (4.6%)	8 (2.4%)	0 (0.0%)	12 (3.0%)	18 (9.0%)	0 (0.0%)	
Clinical training	382(56.2%)	43(13.1%)	113(36.2%)	24 (6.1%)	19 (9.5%)	10(27.8%)	
No experience	267(39.3%)	276(84.4%)	199(63.8%)	358(90.9%)	164(81.6%)	26(72.2%)	

[†] Kruskal-Wallis Test, [‡] Chi-squared test
[§] All Vietnamese are international students

Table 2 統合失調症に対する社会的距離(SDS)の結果(国別比較)

	Japan n=680	Korea n=334	China n=313	Taiwan n=394	Malaysia n=201	Vietnam n=36
統合失調に対する社会的距離(SDS)の全体得点	8.80 ± 3.50	13.72 ± 4.22	14.90 ± 3.94	11.27 ± 4.72	11.62 ± 4.53	13.78 ± 5.18
Q1 統合失調症で入院したことのある人とは付き合わないのが一番である。	0.60 ± 0.67	1.63 ± 0.92	1.33 ± 0.96	1.12 ± 0.97	0.83 ± 0.86	2.19 ± 0.98
Q2* 統合失調症を患ったことのある人々を避けるのは間違いである。	0.57 ± 0.79	0.62 ± 0.72	0.55 ± 0.75	1.00 ± 1.00	1.29 ± 1.16	2.36 ± 1.07
Q3 統合失調症を患ったことのある人の近所に暮らすことになったら、それは私にとって苦になるだろう。	0.97 ± 0.72	1.23 ± 0.84	1.76 ± 0.99	1.14 ± 1.00	1.10 ± 0.93	1.81 ± 1.06
Q4 私は、統合失調症の患ったことのある人が運転するタクシーには乗りたい	1.52 ± 0.86	2.23 ± 0.87	2.39 ± 0.90	1.64 ± 1.07	1.74 ± 1.09	1.42 ± 1.20
Q5 私は統合失調症で入院していた人は雇いたくない。	0.98 ± 0.74	1.83 ± 0.92	2.29 ± 0.91	1.31 ± 1.00	1.27 ± 0.97	1.86 ± 0.96
Q6 精神病院を患ったことのある教師は、学校で教えることが許されるべきではない。	0.72 ± 0.76	1.65 ± 0.97	1.84 ± 1.07	1.21 ± 1.08	1.51 ± 1.08	2.17 ± 1.06
Q7* 私は、ベビシッターを雇うとき、統合失調症の女性であってもかまわない。	2.02 ± 0.82	2.27 ± 0.95	2.75 ± 0.59	2.00 ± 1.03	2.08 ± 0.97	0.97 ± 1.16
Q8 もし、統合失調症を患ったことのある男性と自分の娘が結婚したいといったならば、娘がどうであれ私は反対するだろう。	1.42 ± 0.87	2.28 ± 0.90	2.04 ± 1.12	1.85 ± 1.02	1.80 ± 1.02	1.00 ± 1.12

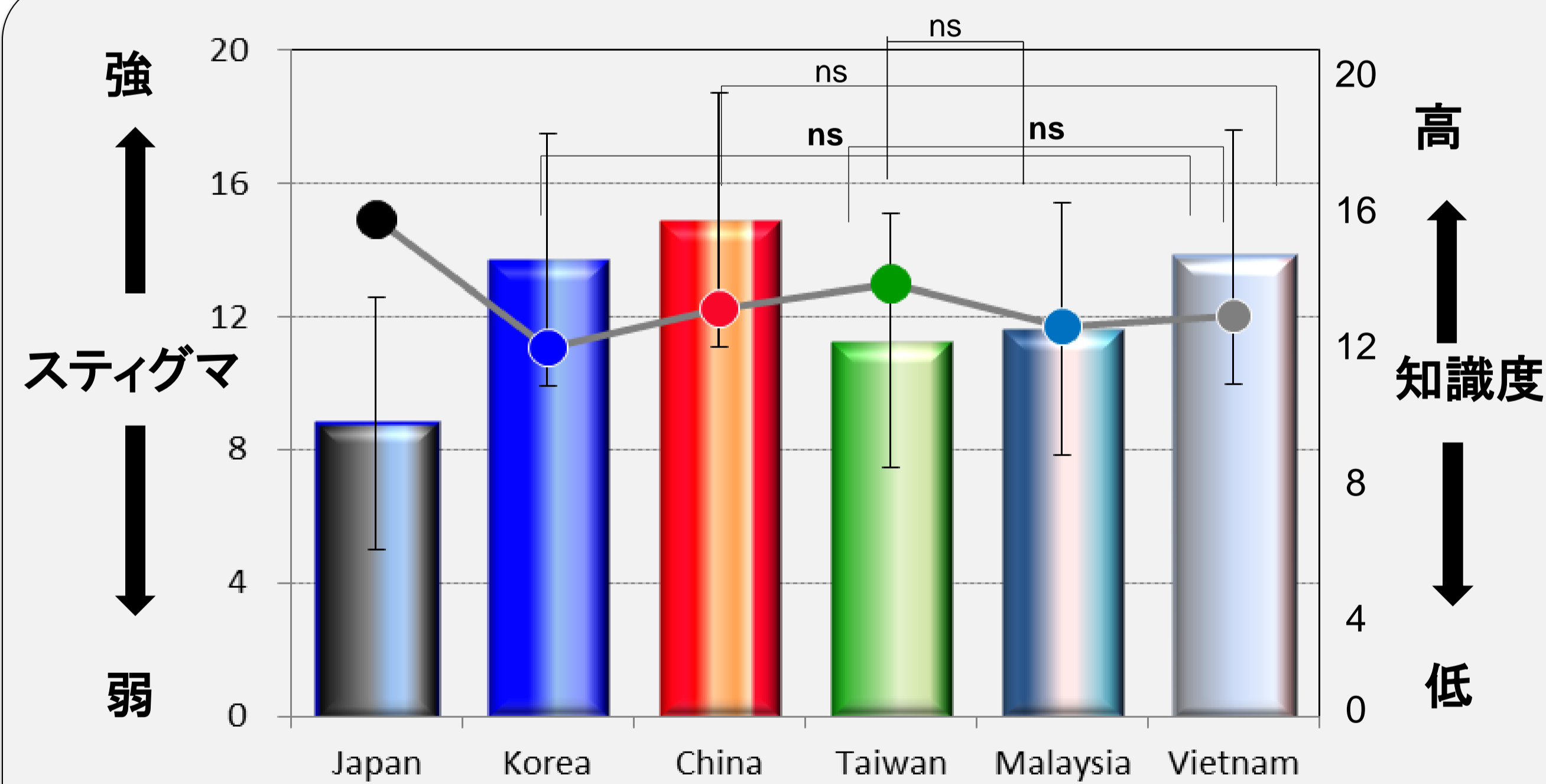


Figure 1 社会的距離 (SDS) と精神医学的知識度 (KIDI) の全体得点

※SDSのns (no significant)以外は全て $p < 0.01$

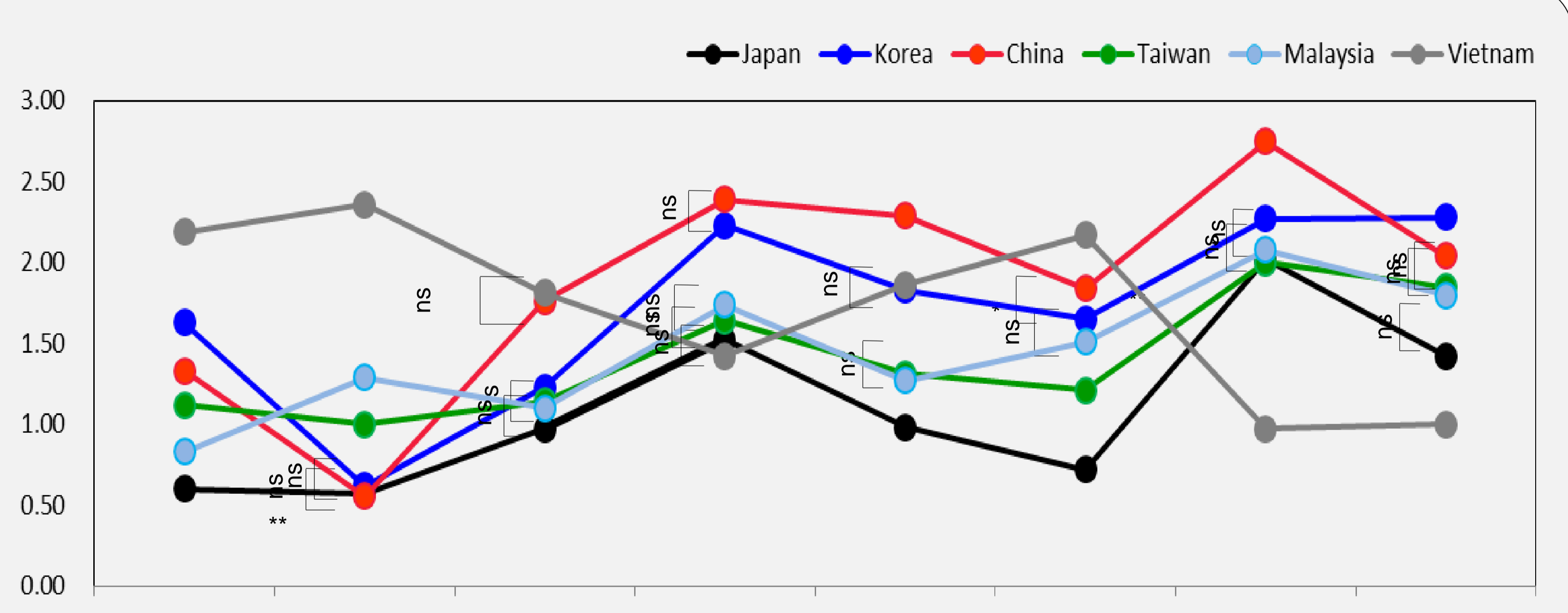


Figure 2 SDSの質問項目(8項目)得点 ※ns (no significant)以外は全て $p < 0.01$

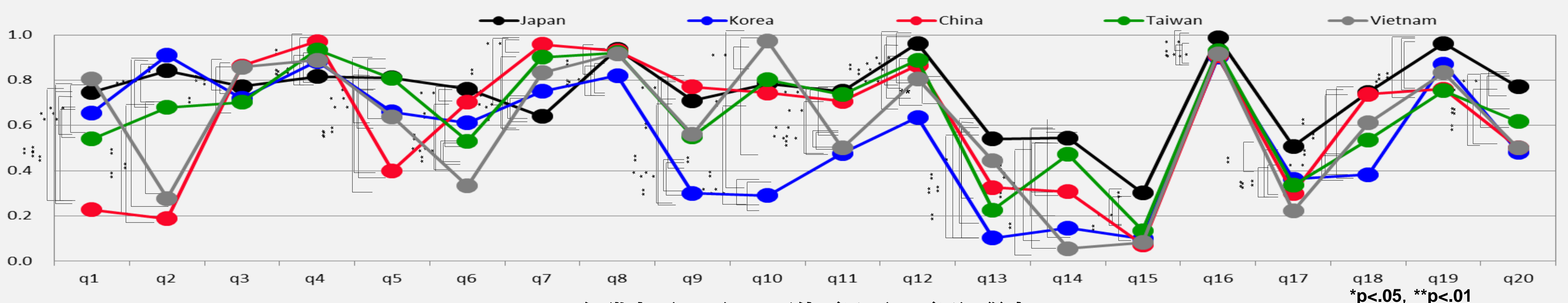


Figure 3 知識度 (KIDI) の下位項目 (20項目) 得点

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

【DISCUSSION】

日本人のスティグマは、東アジア諸国に比較してスティグマが改善されている可能性がある。しかし、「ベビシッターとしての雇用」や「統合失調者が自分の娘と結婚する」などの生活に密着した場面では、依然として高いスティグマが確認された。ベトナム人のスティグマは他国と傾向が異なるが、今後現地での調査を行なう必要がある。精神医学的知識度は、日本および中国、台湾で高く、精神医療に関する西洋医学的知識が中国や台湾で高まっていることが伺われた。また、新興国の中で、西欧諸国やシンガポールとの結びつきも強く、英語を準公用語としている国では、比較的、西洋的な知識度も高く、精神障害者のリハビリテーションに対する理解も高いことが伺われた。

※本研究は、国際医療福祉大学の学内研究費の助成を受けて実施した。